

2018 年度立命館学校教育研究会秋季大会 ご報告

2018 年 12 月 2 日（日）立命館大学衣笠キャンパスの学而館において、2018 年度立命館学校教育研究会秋季大会が開催されました。校友教員の方をはじめとして、立命館大学の学生や大学院生、教育委員会関係者の方など幅広い職種・年代の方にご参加をいただき、100 名以上の方が参加されました。

全体会では、勝村委員（立命館大学政策科学部 教授・教学部副部長）より、学園ビジョン R2030 や新学部設置に向けた動きなど、立命館大学をめぐる近況について報告があり、引き続き、渡部委員（衣笠教職支援センター主任）からは、2018 年度に実施された教員採用試験の特徴や本学学生の受験結果等について報告がありました。

分科会は、今年度も学校現場において関心の高い 5 つのテーマを設定し、いずれの分科会においても、ワークショップ形式で参加者が実際に体感しながら研鑽を深めました。各分科会の詳細については、以下にまとめておりますのでご参照ください。

最後に懇親会では、講師の先生方や来春からの着任予定者も交えて、幅広い年代の参加者が親睦を深め、貴重な機会となりました。



■第 1 分科会

「サイエンス×グローバル ～海外理系高校生と英語で議論する生徒を育てる～」

講師：武田 菜々子 氏（立命館中学校・高等学校 英語科教諭）

コーディネーター：岩崎 成寿（学校法人立命館一貫教育部 部長）

第 1 分科会では、「サイエンス×グローバル ～海外理系高校生と英語で議論する生徒を育てる～」と題して立命館高等学校での取り組みを紹介されました。

はじめに 2002 年度に S S H（Super Science High School）2014 年度に S G H（Super Global High School）の指定を文部科学省から受け、理系の生徒が英語で国外の学生と議論ができるようにすることを目標とし、カリキュラムを変更したことなどの初期からその後の取り組みについて、3 部構成で紹介をされました。

第 1 部「サイエンス×グローバルのシンボル、立命館高校の JSSF」は 2003 年から高校が主催、海外生が参加する取り組みがどのような経緯で始まり、日本最大の高校生のための科学国際行事になったか、苦労話も入れながら、第 2 部「サイエンス×グローバルの相乗効果」では英語力のない高校生を年代ごとに海外生と議論ができるようにするため 3 年毎の到達

目標を設定しての授業を、第3部「英語授業から考えるサイエンス×グローバル」では、取り組んでこられた英語の授業風景をビデオで紹介しながら生徒の成長する姿を紹介されました。

最後に、世界に出るためのハードルを設定、その垣根を越えることができる学生が多く育て来たこと、生徒の成長が目に見えること、それらのことが「サイエンス×グローバル」の授業をする意欲が強くなると締めくくられました。

■第2分科会

「授業と連携したワークショップの実践 - 学校と博物館のよりよい関係へ - 」

講師：西山 剛 氏（京都府京都文化博物館 学芸員）

コーディネーター：平岡 信之（京都教育大学附属桃山小学校 教諭）

第2分科会には27名が参加し、京都文化博物館の西山剛氏に、京都文化博物館と学校が連携した実践事例をパワーポイントを通して紹介していただきました。まず、「ワークショップとは？」から始まり、ワークショップは、「仕事場」「作業場」を意味する言葉であり、意見や技術の交換・紹介を行う研究会や参加体験ができる講習会であること。また、博物館におけるワークショップは、 展覧会のよりよい理解のため 普段は足を運ぶのが少ない年齢層（若年層）へ向けた普及活動 現在、学校に通う（学びの最中）人々への強いアピールを目的に行われているというお話がありました。

参加者が興味を持ったのは、学校と連携して行ったワークショップでした。

一つ目は、京都教育大学附属桃山小学校と連携した、「新しい洛中洛外図屏風を作ろう」の取組です。「洛中洛外図屏風」を見て「方角」を考えたり、描かれている内容を考察します。子どもたちは興味を持った場所を探しに校外に出かけ、写真や絵を集め、それをもとに自分だけの「洛中洛外図」を制作します。この取組を通して、洛中洛外図が世界に例を見ない京都だけの良質な地域資料であること。京都に生活するからこそ持てる視点など地域学習として利用するメリットがあるとのことでした。

その他に、東京都文京区立湯島小学校と連携した、「北野天神縁起絵巻プロジェクト」の取組や、向日市立勝山中学校と連携した国語の教科書の内容を用いたワークショップ「君待



つと 万葉・古今・新古今」の取組の紹介がありました。

最後に、博物館は教材の宝庫であり、学校における日常の学びを強度に補完する所蔵資料があるのでぜひ活用してほしい。また、実は学校の中にも所蔵資料の中に、考古学的に非常に価値のあるものもあり、ぜひ学校で「教材」にしてほしいということでした。

■第3分科会

「一人で抱え込まないで～困ったときのケース会議～」

講師：角田 豊 氏（京都教育大学大学院連合教職実践研究科・京都産業大学 教授）

コーディネーター：井上 政嗣（雲雀丘学園小学校 教諭）

溝淵 誠太郎（豊中市立少路小学校 教諭）

講師の角田先生は臨床心理学がご専門で、12 年前に京都産業大学から京都教育大学大学院連合教職実践研究科に派遣され、これまで多くの教員養成に尽力されてこられました。また、カウンセラーとしても京都府総合教育センターにおいて教育相談をおこなっておられます。そうした研究実践を通し、日々の教育活動における経験知と最新の研究理論の往還を目指し現在に至っておられます。

今回は「ケース会議」の実際を学ぶために「事例研究用フォーマット・プロセスレコード」をツールとして用い、具体的な事例を省察(振り返り)することで理解を深める内容でした。まず前半は理論面から、子どもとかかわる実践力を「学校臨床力」ととらえ(学校臨床力とは、人間関係に開かれながら、子ども〔家庭〕に何が必要かを見立て、かかわっていく教師の力、と定義) 現代の教師に求められる「多様性」や「個別性」、「関係性」についてお話がありました。特に、そこでは省察における教師の「感性」が重要であることを示され、その「感性」を磨くために、子どもとのかかわり合いを「意識的・言語的に振り返る(reflect)」作業の有効性について述べられました。また、実践事後の省察として、自分で振り返る「自己省察」と、他者と振り返る「グループ省察」がありことを説明され、この分科会後半では参加者による「グループ省察」を体験しました。

4～5人のグループに分科会参加者の皆さんが分かれ、振り返りたい子どもの事例・学校臨床上の課題に「自己対峙」(自分事として共に考える) することを目的とし、実際の事例を基にしたグループ討議をおこないました。ここで「事例研究用フォーマット・プロセスレコード」を用い、こどもが抱えている課題に対してチームとして対応することの意義を改めて確認することができました。今後の教育実践に有効な手立てを示していただいた、貴重な分科会であったと思います。

■第4分科会

「学び続ける教師を育成する仕組みづくり ～メンタリングによるチームOJT研修～」

講師：長谷川 伸 氏（神戸市立葺合高等学校 教諭）

コーディネーター：岡本 真一（神戸市立須磨翔風高等学校 校長）

第4分科会は3人一組の班に分かれ、次の流れで進行しました。第4分科会を選択した理由を含めた自己紹介、各勤務校の課題についての意見交換、講師である長谷川伸先生の大学院での研究成果及び勤務校での実践報告、長谷川先生の報告を踏まえての課題解決に向けたグループ討議と意見交換、まとめ。

近年、ベテラン教員の大量退職と若手教員の大量採用という激しい世代交代が進んでい

ます。長谷川先生は若手教員の資質向上が喫緊の課題と考え、学校での人材育成を大学院での研究テーマとされました。「摩耶兵庫メンタリングプログラム（MMP）」と銘打ち、所属校でチームによる OJT 研修を昨年度から開始しました。これは、中堅教員（メンター）が核となり、ベテラン教員（アドバイザー）から学び、若手教員（メンティ）を育てるといった 3 世代でのチーム編成による OJT で、若手教員の育成はもとより全職員が学び続けるチームとなることを目標としています。この取り組みにより、全職員の力量向上、同僚性の向上、組織の活性化等といった成果があったとの研究報告でした。

グループ討議や全体の意見交換では、活発に質問や意見が出され、あっという間の 2 時間でした。組織的な人材育成といった素晴らしい実践研究発表やそれをもとに参加者から様々なアイデア等が出され、今後の各学校での教育実践に活かせる実りある分科会となりました。



■第 5 分科会

「学校でのピア・サポートのすすめ―「恩返し」から「恩送り」の社会をつくる―」

講師：菱田 準子 氏（立命館大学大学院教職研究科 教授）

コーディネーター：森田 真樹（立命館大学大学院教職研究科 副研究科長）

第 5 分科会では「学校でのピア・サポートのすすめ―「恩返し」から「恩送り」の社会をつくる―」と題して、大阪で教鞭をとられ、現在はピア・サポート学会の理事もされておられる立命館大学大学院の菱田準子教授にお話しいただきました。また、ワークショップも実施し、ピア・サポートの一部を体感できる分科会となりました。

まず、今後人生 100 年時代となるにあたり、自ら幸福を作り出すことができる子どもを育てていかなければならないとし、誰かの役にたつことや他社への感謝や思いやりをもつことが生きる喜びにつながることにについて、ご説明いただきました。その後、3 人 1 グループに分かれ、演習を行いました。自分のワクワクを探すことや、1 人の話を聞き 2 人がその人の強みを伝えるワークショップを行い、自尊感情を育む方法を体感しました。最後に、学校現場で子ども同士が支援を行う方法や教室での演習方法をお話しいただきました。明日からの教育実践に活かすことができ、参加者自身の心も温まる、深まりのある分科会でした。

以 上